



昭和42年(1967年)

11月号(No. 269)

社団法人 日本山岳会 (J. A. C.)

目次

ルーム基金募集状況について…………… 8  
 ルーム基金募集委員会  
 HINDU KUSH(1967)…II…………… 2  
 ヤジュン峰初登…広島大学登山隊  
 会員通信  
 Grindelwald から ……井手責夫… 1  
 梓会 便り……………茶谷東海… 5  
 随 想  
 南北アルプス断片……………松崎中正… 4  
 神山勉の死 ……初見一雄… 4  
 サラグラールの印象……………雁部貞夫… 3  
 行事報告  
 ルーム移転パーティ……………関口周也… 6  
 図書紹介  
 飯豊連峰大地図(山崎安治)…………… 7  
 エベレストへの闘い(望月達夫)… 7  
 会務報告……………14  
 会員異動……………14  
 新入会員……………15  
 お知らせ…………… 1

グリンデル  
ワルトから

井手責夫

(前略) 一カ月半余りドイツのネット  
 カール川畔マールバツハで神妙に読書  
 三昧にふけていました。が、あんなに  
 この夏の暑さが、ひどいのをよい口実  
 に、ヘッセの住んでいたモンタニョ  
 ラをたずねかたがた、スイスに入って  
 しばらく旅を続けた後、疲れを休めに  
 グリンデルワルトへ来ました。シタイ  
 リをたずねましたら、丁度ブラヴァン  
 ト夫妻が帰っているというので、電話  
 をしましたところ、早速ブラヴァント  
 自身が車を運転して迎えに来て、下さ  
 り、お宅で夫人から茶果のおもてなし  
 をうけながら、むかし話や四方山話に  
 しばらく時を忘れていました。その時ブラ  
 ヴァントが突然、時にどうして横と知  
 合になったか知っているか、と問い出  
 して、その時のことを、こんな風に説  
 明してくれました。当時ブラヴァント  
 がグリンデルワルトで先生をしていた

時、ある日ホテル・アドラーの主人が  
 たずねて来て、「じつに、じつにいい男  
 がいてドイツ語を習いたがっているが  
 教えてやってくれないか」というけれ  
 ど、とに角自分は忙しいので一生懸命  
 断ったが、とうとう承知させられて教  
 えることになった。それが横で、じつ  
 にじつにいい人で、ドイツ語の方も目  
 ざましい進歩をして、まことに教えが  
 いがあった。そのうちに一緒に山に行  
 くようになって、自分の案内人手帳の  
 第一頁を横が書いてくれた。それから  
 松方が来て、それからだれが来てとい  
 うような話。

それから私がひとつ山を試みたいと思  
 うが、だれかいい案内人はいないだ  
 ろうか、という、自分の息子が案内  
 人をしていて、都合を聞いて見よう  
 ということ、ブラヴァントと全く同名  
 のザムエル・ブラヴァントが私の案内  
 をしてくれることになりました。とて  
 も山を歩く暇なぞないはずだったので  
 すが、八月二十四日頃にくる筈だっ  
 たが、急に都合で二週間おくれれて  
 妻が、急に都合で二週間おくれれて  
 きたわけですね。じつをいうと私のめ  
 ざすのはグロース・シュレックホルン  
 だったので、スイスの山の中でも

一番難しいのに属するとドクター・ブ  
 ラヴァント、即ち父親の方がいうので、  
 わけを聞いて見ると、とに角一日に二  
 千メートル直登して、そしてまた降り  
 て来なくてはならないというので、こ  
 れはもう私の体力ではとても望み得な  
 いとおきらめました。息子のザムエル  
 はウエッターホルンをすすめるので  
 が、私は一番易しいのをひとつ試みよ  
 う。それで私に登れるとザミが思うな  
 らウエッターホルンを試みようとい  
 いました。そしてスイスで一番易しい山  
 がメンヒとユングフラウだというので  
 す。これは登山電車のおかげで三千五  
 百メートルまで達し得るので、残り五  
 百メートルか六百メートルを登ればよ  
 いから一番体力的に楽なわけですね。秩  
 父宮様も横さんの案内で、これから始  
 められたと父親ドクトル・ブラヴァン  
 トがそばから説明してくれました。  
 そんなわけです。二十七日の夕方ザ  
 ムエルと一緒にユングフラウ・ヨッホ  
 ッホを出て、まず十七時を試みまし  
 た。大体三時間が標準だそうですが、九時  
 に頂上に着きましたからまずまずとい  
 う所でしょう。下りは二時間、お昼に  
 ヨッホに着きました。北海道の冬山を

多少やっただおかげで、雪の上をかもし  
 かのようには走る、と大いにほめられま  
 した。  
 二十八日はユングフラウで、これは  
 四時に出かけて、頂上着が八時半、ヨ  
 ッホに十一時に帰りました。この日は  
 日曜だったので、五、六組が登って来  
 ましたが、私が最年長ということで大い  
 に敬意を表されました。午後は早速グ  
 リンデルワルトに下り、ザミはこれか  
 らウエッターホルンの小屋まで三時間  
 登ろうというのですが、それはどう  
 も私の体にはすこし無理だからと断っ  
 て、この日はグリンデルワルトとしま  
 り、二十九日の午後ウエッターホルン  
 の小屋(二二一七メートル)にとまっ  
 て、三十日午前四時出発、九時半頂上  
 (三三〇七メートル)着、下りは小屋ま  
 であと三十分あまりという所で、急に  
 疲れが出て、十二時半頃に帰れるもの  
 を、花を写真にとるとという口実でぶら  
 ぶらしながら一時半頃に小屋に着きま  
 した。そしてもうグリンデルワルトま  
 で歩くよりはここで休養して明日下り  
 ることにして、この便りを書いていま  
 す。どうか皆さんによくお伝  
 え下さい。(一九六七年八月三十日、  
 望月達夫宛) (完)

第三九回小集会

お 知 ら せ

△とき 十一月二日(水) 6・30  
 △ところ 本会集會室  
 「エベレスト、チョーオユー、トリス  
 ル」ブッシュ氏  
 今月の小集會は、エベレストを始め  
 チョー・オユー、トリスル等の登山で  
 活躍したインドのブッシュ氏をお招  
 きして、氏自身のヒマラヤ登山を中心  
 にした講演会です。  
 氏の豊富な経験と知識は、我々にと  
 って非常に興味尽きないものといえる  
 でしょう。氏が撮影したカラー・スラ  
 イドを同時に上映する予定です。

年次晚餐会

△とき 十一月一日(金) 6・30  
 △ところ レストラン・プリムラ東京  
 ・新宿・伊勢丹會館内  
 △会費 一五〇〇円  
 なお、本年のこの一本展は明治百年  
 にちなんで「明治百年山岳圖書展」と  
 題して開催の予定です。  
 これについては追って御通知いたし  
 ます。

忘年会

△とき 十一月二日(水) 6・30  
 △ところ 本会集會室  
 △会費 三〇〇円  
 毎年東京支部で行っておりました忘  
 年会を、今年から山水會(婦人懇談會)  
 が主催して開催いたします。例年のよ  
 うに、プレゼントの交換を行ないます  
 から、百円相当の贈物を各自で用意  
 下さい。なお、当夜はフランクス大使館  
 提供のスキー映画の傑作「雪の夢」を  
 上映する予定です。ご期待下さい。皆  
 様お誘い合せの上、参加して下さい。  
 希望者は、十一月一日までに、本会  
 事務局へ申込みのこと。

# ◇ヒンズー・クシュ便り◇

## — 遠征隊 (一九六七年) —

### ヤジュン峰登頂

残暑厳しい日々でございますがおおかりないことと存じます。

さて、皆様方のおかげをもちまして七十日間のヒンズー・クシュ遠征(広島大学)を終え無事帰国いたしました。留守中何かとお世話になりました。お礼申し上げます。

くわしい報告は荷の到着をまわっていただきたいと存じますが、調査の方は測定条件を同一にするということに悩まされながらも一応遂行することができましたし……

登山もムンジャン谷、ナオ村近くの六〇二四米の未踏峰に八月

三日初登頂することができました。村の人達がヤジュン沢と呼んでおります源頭の山でございますので「ヤジュン」と呼びたい考えです。

八月二日六時、学生の石田隊員と二人で五二〇六米(五二五〇米)の所にはりましたキャンブIIを出発し、氷のクローワールを登りはじめましたが、その日にはついに登れず、五八〇〇米の地点でやっとこしかけられる岩棚をみつけ、そこでテントも寝袋もなくねむりました。午後四時頃です。

翌八月三日。六時から行動を起し、九時十五分、頂きに達しました。一番

高いところは大きな岩でした。遠くワハン谷の山々が重なってみえており、思いがせららにとぶのでした。

降り登り以上素の足からくる頭痛と、吐き気とに悩まされ、水の上で靴をすべらせ

ないよう神経を使いがらテントに帰りついたのが七時でしたから出発

してから三十七時間の間でした。とりあえず無事帰国の御挨拶まで。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

(追伸) カールへお便りありがとうございました。地図が出来次第「山」にも原稿お送りさせていただきます。

一九六七・八・三一

舟橋明男

### 広島大学 H・K 遠征隊日記抄

(吉沢一郎宛)

六月一日 増水副隊長、石田、羽田発。

二日 平位、舟橋、羽田発。二日 増水、舟橋、カラチ発。先に船で送った装備、食糧を載みトラックでアブガニスタンに向う。カール迄七七時間を要した。

三日 平位、石田、汽車で出発。七月二日 全員カールに集結。

一日 特別バスでカール発、ダシテラワトに向う。

二日 九頭の馬と共にアンジュマン・パスを越え、ムンジャン谷に入るルートのキャラバン開始。

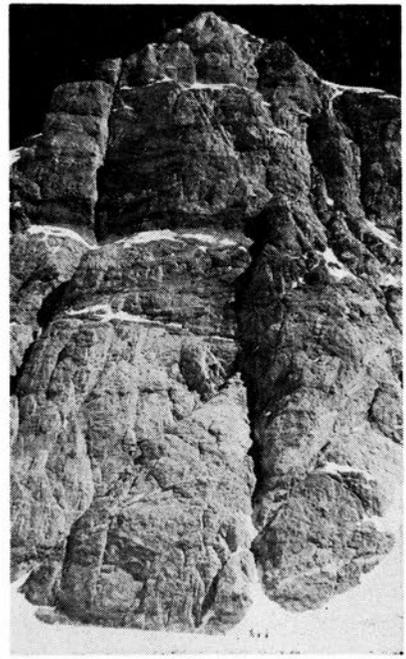
二日 ムンジャン谷最奥の村、ナオに着く。ベースキャンプを作る。

二日 舟橋、石田、ナオの北にあるはずの六〇二四メートル峰と、そこから流れ出る谷を捜しに出発。ムンジャン谷に沿って上流へ向う。両側には五〇〇〇メートル級の山が並んでいたが目標は見えなかった。

三日 増水、石田、偵察に出る。左側より入って来るU字谷を発見。四二五〇メートルまで登る。三九〇〇メートルから上部は水河となっており、目標を判断した。

五日 ベースキャンプを目標の谷の段丘に移す。ナオ村の人はこの谷をヤジュンと呼んでいる。標高は三二〇〇メートル。

二六日 ナオ村の夫夫を使って四二五〇メートルの水河上に第一キャンプを作る。増水、平位、舟橋、石田、第



ヤジュン峰 (C II) の少し上から

一 キャンプ入り。

二七日 増水、石田、ヤジュン氷河の左又へ偵察に行く。二段になった急傾斜を越すと五二〇〇メートルからは大雪原になっていた。雪原の左右正面とも、七七八〇メートルの垂直に近い壁を持つ岩稜で、稜線に達するルートは見えなかった。頂上もわからない。

二八日 平位、舟橋、ヤジュン氷河の中又に偵察に出る。約二〇〇メートルのアイスフォールの左側を抜けると、五一〇〇メートルからはこちらが大雪原だ。右側の五七六〇メートル峰

がすぐ目に飛び込んでくる。頂上と思えるピークとそこへ延びているらしい雪のルンゼに希望を持つ。帰途は右又氷河へ抜け、アイスフォールは左のガリに逃げ、第一キャンプに帰る。

二九日 増水、舟橋、ヤジュン氷河、中又雪原に第二キャンプを作るため出発。酸欠不足に悩み、半荷を予定地にデポし、四七〇〇メートルに引帰し泊る。平位、石田、途中まで食糧の荷上

三日 増水、舟橋、第二キャンプを作り、続いて五五〇〇メートルまで

偵察に出る。一昨日平位らが見つけたルンゼからは頂上には行けないことがわかる。平位、石田、四七〇〇メートルに荷上げ。

三日 増水、舟橋、偵察に出る。雪原を詰め急なルンゼより稜線に出る。北側は一〇〇〇メートルほど切れ落ちたナイフリッジだ。尾根通しに頂上に向う。四〇メートルザイルで五ピッチ目に、私達では登はん不能の壁に

当り引帰す。帰途、左又氷河と中又を分けている岩稜に食い込んでいる、雪のクローワールを今後のルートと決める。傾斜は約七〇度、稜線までは六〇〇メートルだろうか。

八月一日 石田、第二キャンプ入り、増水、平位サボト。

二日 舟橋、石田、頂上へ向け出発。クローワールでは、水の上のくさった雪層に悩まされる。一日ではついに突破できず、一五時、五八〇〇メートルで幅三〇センチの岩棚にセルフブレイクして、ツェルトザックだけのビバークとなる。増水、平位、第二キャンプ入

り。

三日 舟橋、石田、稜線に出て見ると、昨日まで頂上と思っていた雪の三



ヤジーン峰頂上より五九五四米峰（未踏峰？・雪の平頂）とバンドグカー（六八四三米）

角峰は第二峰である。ナイフリッジを渡り頂上に向う。九時一五分、六〇二四メートルのピークに立つ。頂上には先蹤者の跡は見当らなかつた。下りはアプザイレンの連続で八時間を要した。五日、増永、平位、第二キャンプより雪原を行き、クーロワールとは反対斜面の雪壁を約二〇〇メートル登り、ナイフリッジを二ピッチ、五七〇〇メートルの第三峰の頂上に立つ。

六〇二四メートル峰はナオ村やムンジャン谷の道からは見えなくて無名であった。私達はこの山から出る谷がヤジーンと呼ばれていたところから、ヤジーン峰と名付けたら、と考えている。

大津の舟橋君より連絡がありましたので、お役に立つかどうかわかりませんが、まとめて見ました。文中の標高はカーブルにありますカートグラフィク・インスティテュートで確かめたものです。写真は舟橋君がお送りいたします。私は目下会の最新参というところです。(N. 〇・六二八九号)

御自愛なさって今後益々御活躍なさいますようお願い申し上げます。  
増永迪男拜

吉沢 一郎様  
九月九日

追伸 先生が戦前しばらく広島にお住まいになっていらつしたことにつきましては、いろいろお話を伺聞きしています。

—— 写真は二枚とも  
舟橋明男氏撮影 ——

≡ サラグラールの印象 ≡  
—— 一九六六年の旅から ——

六二八八 雁部 貞夫

昨年の夏、私はチトラー（パキスタン）の山奥、高山植物の咲き乱れる

グラム・シャルの一角から、サラグラール山群の北面を見上げていた。一九五九年のイタリア隊（リーダー・F・マライーニ氏）が何故、北面からこの山をアタックせず南側のハロギ氷河へ転進したのか、直ちに私は了解し、その急峻な北壁はクーロワールにわずかな雪をとどめているだけだったので。

ジワル谷を溯行して初めてはるかな谷の奥にサラグラール（七三三八米）の美しい雪の三角錐を見た時、ひどく秀麗な感じを受けた。グラム・シャルから見たサラグラールは三つの雪のピラミッドを並立させていた。私は朝夕、バラ色に輝くその頂きを飽くこともなく見つめていたものである。

チトラーへの帰途、プニ・ゾム（六五五三米）へ試登した際、私は東部ヒンズー・クシユの主要な山々の豪勢なパノラマを眼前にした。なかでも目をひいたのは南からテイリリッチ・ミール（七七〇八米）、イストル・オ・ナール（七四〇三米）、サラグラールと続く



高峰群であった。その様子（二六六号）は「山」のG中の「遊心」は又しても物々々動きはじめる昨今である。

・ミール以外的高峰はマストツ川の本流沿いをキャラバンしていた時は全く見えなかったのに、プニ・ゾムからは実に素晴らしい雪稜となって目の前に現われた。颯爽と雲をつなぎてそびえるテイリリッチ・ミール。怪異な馬蹄形の頂きを露わにしたイストル・オ・ナール。大きな根張りの上に、どっしりと雪の峰々をのせたサラグラール。このそれぞれ個性の異なった山々に私はヒンズー・クシユ三山の称を奉った。ここから見たサラグラール南面は、グラム・シャルからの眺めとは全く異なった山容をしていた。あの秀麗な感じは無く、山全体がみじんもゆるがぬ重量感にあふれていた。この姿は妙に人をひきつける力を持っていた。

新聞の報道では今年の八月、一橋大雪山山岳会は、サラグラール南峰に初登頂したという。私の写したサラグラール南面の写真が、どの程度お役に立つたか判らないが、登頂成功の報を聞いて、他人事のように思えなかつた次第である。同隊の登ったウドレン・ゾム南峰（七〇五〇米）の写真を今、ここに掲げよう。矢張り昨年、プニ・ゾムから写したものである。「写真がうすいので絵にしました」編者。右の雪の頂きが Shachau（七〇八四米）、ウドレン・ゾム主峰はすぐ左に雲の中に見える峰である。

日本隊の相次ぐ成功を耳にすると、私の「遊心」は又しても物々々動きはじめる昨今である。

ポーター達はサラグラールをサルワライ (Sulwale) と呼んでいた。サラグラールは外国人の言い方である。ポーターは遠の言った事で確信は持たぬが、サラグラール南東面に Shachau、赤河というのがイタリア隊の記録に出て来るので万更出題目とも思えない。皆さんのご教示をいただきたいと思ひます。

1967



### 南北アルプス断片

正 中 崎 松  
5873

六、北沢

キャンパーの絶好のキジ場になって  
すく上の樹林一帯は北沢  
クスのように小さな便所は蠅の猛攻で  
入ることができない、そうかと言っ  
て北沢の下流の河原まで用足しに行く  
ことは緊急の場合間に合わない。  
どんな水を飲もうとビクともしない  
登山者になることは望ましいことであ  
るが、北沢も国立公園にはいたのだ  
からどうにかならん立国なのか。キャン  
パー一人当り三十円だか五十円だか  
のシヨバ代は一体何に使われるのだら  
う。徴集してきた人に聞いたが答は得ら  
れなかった。キャンプ・サイトをよこ

り、人々はこれを炊事に  
使ったり水筒につめたり  
している。ところがこの  
清水の源であるところの

南ア北部の玄  
関北沢の不潔さ  
はどうにかしな  
ければならな  
い。長衛小屋付  
近には何本か清  
水が流れ出てお  
意により北岳をあきらめようというの  
だ。さぞ無念なことであらう。

す登山者も勿論悪いが、お金を取る人  
たちも何とか考えてみて下さい。  
七、病人をおろす  
入山三日目の朝。下痢で苦しんでい  
た生徒のTをとうとう藪沢カールから  
帰さねばならなかった。Tは一人で下  
るといふが、荷物はあることだし、も  
しもの場合に途中で合う他の登山者も  
あてにするのはよくないことだ。自分  
たちのことは自分たちで処理しなけれ  
ばならない。誰がTに付添って下るか  
ということではキャンブはもめた。  
突然三年生のKが申し出た。「俺は  
もう夏山合宿も三回経験できた。そし  
て来年春卒業すれば、いつでも好きな  
山に行けるようになる。俺に下らせて  
くれ」夜明け前の暗やみの中に景気よ  
く吹くスベヤのほのおがうるんだKの  
目をかすかに照らしていた。

しかし私はひそかにKが羨ましい心  
の持ち主であることを祝福した。二年  
半の高松山岳部の生活の中で彼は見事  
に精神的にも成長してくれたのだ  
。彼は実に鮮やかに真の登山の姿を  
私たちの前に示してくれた。生徒一人  
一人の胸には「Kの真心のこもった友  
情に報いるために立派な合宿を終つて  
帰らなければ」という決意がよみがえ  
つたに違いない。

私はKの心中をおもって心が痛ん  
だ。実は彼は一年生の時、北岳登頂を  
前にして兄の危篤の報を受け、広河原  
から急ぎよ帰宅しなければならなかつ  
たのだ。そして再び今度は彼自身の発  
意により北岳をあきらめようというの  
だ。さぞ無念なことであらう。

八、馬鹿尾根

南ア北部の原生林の中を行く道では  
仙臺尾根が一級品だ。ここを退屈な馬  
鹿尾根と呼んだ人こそ相当の馬鹿だ。  
たに違いない。シラビソ、コメツガ、  
ソウシカンバなどの薄暗い林の中をひ  
とすじ、倒木で部厚い苔におおわれて  
静かに自然に帰る日を待ち、シダ、カ  
ニコウモリ、ハリビキの葉に夏の木も  
れ陽が輝やく。足の裏にころよい苔  
のクッションを踏んで、その名も魅力  
的な野呂川越を東に下れば、両俣小屋  
は今日もひっそりと、いかにも南アル  
プスのなたなすまいを見せて静まり返  
っていた。

鳥を一つの間山旅も終りに近づいた。農  
鳥を一つの間山旅も終りに近づいた。農  
鳥を一つの間山旅も終りに近づいた。農

鳥を一つの間山旅も終りに近づいた。農  
鳥を一つの間山旅も終りに近づいた。農  
鳥を一つの間山旅も終りに近づいた。農

九、北岳の花

北岳頂上の荒れ方はひどい。パット  
レス側には空かんとこみが美事ななだ  
れをなしている。  
しかしさすがに付近一帯にひろがる  
お花畑の豪華絢爛さにはかなわなかつ  
た。流れるガスの中にくつむくミヤマ  
オダマキの花の色、特産のキタダケキ  
ンボウゲもあったし、珍らしいムカゴ  
ニキノシタも可愛い真紅のムカゴをつ  
けていた。

戦争中から発行が中止されていて戦  
後初めての出版だから大いに骨を折つ  
たに違いない。もちろん彼独自の努力  
だけではない。彼を助けた多くの先輩  
後輩がいた事は、当時の編集スタッフ  
を見れば判る。ただ彼が中心になって  
働いたことは紛れもない事実であらう  
。上級生を使いこなした、こう書いた  
ならば誤解される向きもあるが、芯  
に巻きこんで、鮮やかな色彩に織り  
込んでいった美事さは並みの手腕では  
なかつたと思う。

「風邪を引いた様だ」風呂から上つ  
てからの一言、その直後脳内部の出血  
が始まった、同時に発言が閉ざされた。  
東北大学での手術で、一時少康の萌  
しがみえたが、鳴子温泉での温泉療法  
が悪かったといわれる。かといって急  
変したのではなかったが、生ける屍の  
状態がずっと続いたのである。これは  
悲惨だったとよりいようがない。  
彼が日本山岳会に尽したことを言え  
ば「山日記」の編集であらう。昭和二  
十四年から五年・六年と九三カ年間続  
けられた。

「風邪を引いた様だ」風呂から上つ  
てからの一言、その直後脳内部の出血  
が始まった、同時に発言が閉ざされた。

### ◆『山日記』をやった◆

発病が去年の十二月で死亡  
が七月の末日だった。暑い日  
であった。  
脳膜出血という真に不幸な  
業病にとりつかれてしまつ  
た。言語、意志の表現が不可  
能な症状である。八ヶ月、よ  
く保ったといわれる、彼の強  
靱な意志の故か。

### 神山勉の死

初見 一雄

一つの山岳部の歴史を見ても、こう  
した特質をもった人間の出現は二十年  
に一人、三十年に一人といったもので  
はないだろうか。  
もちろん論外にも優れた所があったに相  
違ないが、我々にはこの才能のみが光  
ってみえて総てはそれにかくされてし  
まった様だ。  
相馬原ノ町に引きこんでしまつて、  
家業に専心して居る間は、数年に一回  
位の割合でしか訪れ合うこともなかつ  
たし、山岳会の会合にも顔をみせるこ  
とはなかつたが、今それを残念に思う  
仲間を羨めることは真に面映いこと  
だし嫌いなことでもあるのだが、しか  
し正直いって神山の場合だけは別だ。  
この誇りは甘んじて受けよう。  
彼の将来に対する期待、切々たるも  
のがあった我々にとって、その死を惜  
しむことをばばかるまい。  
杉田くめ女の一句を借りて結びとす  
るのはその意味を含める所以である。  
風に落つ、楊貴妃さくら  
房のまま  
(六七・九二八)

神山 勉氏(会員番号三〇九〇番、  
昭和22年10月入会紹介者 初見一雄)  
長らく病氣療養中のところ、7月31  
日永眠されました。享年51歳、謹し  
んで哀悼の意を表しました。  
氏は日大山岳部OBで、昭和23年  
25年理事をつとめた。特に山日記の編  
集では戦後第一回目的編集委員長とし  
て多大の努力をはらわれ、お茶の水  
11ムの基金募集の点で多大の貢献をさ  
された。  
葬儀は8月12日午後1時より九三製  
紙の社葬により青山葬場において行わ  
れたが、本会より、松田理事の他会員  
多数が参列して弔意を表した。  
(喪主)妻 神山せい子  
福島県原町市橋本町一ノ二一

戦争中から発行が中止されていて戦  
後初めての出版だから大いに骨を折つ  
たに違いない。もちろん彼独自の努力  
だけではない。彼を助けた多くの先輩  
後輩がいた事は、当時の編集スタッフ  
を見れば判る。ただ彼が中心になって  
働いたことは紛れもない事実であらう  
。上級生を使いこなした、こう書いた  
ならば誤解される向きもあるが、芯  
に巻きこんで、鮮やかな色彩に織り  
込んでいった美事さは並みの手腕では  
なかつたと思う。  
このことだけから抽き出す結論では  
ないが、彼を人を統率する才能があつ  
た。或いは生れつきの資性であつたか  
も知れない。それでは良きスタッフ  
を集めることが出来た。

◇祥会だより◇

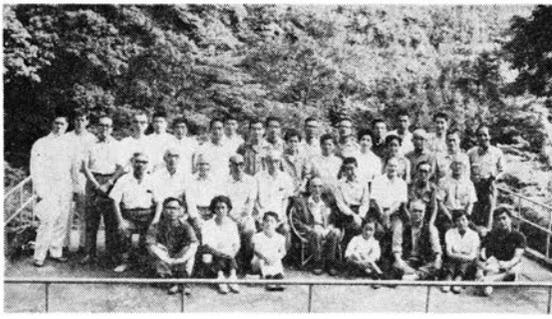
茶谷 東海

去る九月十日(日)復活第六回年次行事を次の通り実施した。村井米子さんを来賓を迎えて参加者五二名、内新人三〇名の盛況であった。

一、第三回ハイキング

A班 参加者は村井米子、岡村治信、浜田一馬夫妻、茶谷東海夫妻と二男夫妻、橋本秀敏御岳神社頂上駅から大橋峠へ下り、B班と合流して更に氷川へ下り一四三〇三河屋旅館着。

B班 参加者は朝井一男防大出部長以下O B、山田隆一防大ワンダーフォーゲル部コーチ以下O B、進藤波男と三女女子等二六名、一〇三〇鳩の巣駅より大橋峠へ登りA班と合し三九名のグループとなる。進藤さん写真班として大活躍、晴天、無事故。



二、第六回総会兼懇親会

出席者は田部重治名誉会長、長谷川太郎防大ワンゲル部長、紺野逸弥元海軍経理学校長、防大大学生等とハイキング参加者を合わせ四九氏。三河屋で一五〇〇開会、先ず茶谷幹事よりハイキングと懇親会を同日に実施すること、時間的地理的に無理があるのでは来年よりは両者を分離し、ハイキングを年二回以上行ない、その名を水交ハイキング(水交の名は海軍士官の親睦団体の元水交如水)が出水と同様梓子の君子之交淡如水)が出水と称し梓会幹事がその世話をすることを提案し了承を得た。

次いで講演に移り、田部さんから初めて三河屋に泊ったのは明治四十二年五月二十一日木暮理太郎君と雲取山に登った日である。その時の家は今の建物ではない。この旅で三頭山と言う山が得体の知れぬ山だったので木暮君と共に数馬から登ろうと企てて目的を達したは明治四十四年の五月でその時は山崎旅館は物品販売所だった、その後一人で三頭の大滝を見に行ったのは

◇帰国御挨拶◇

広島大学

ヒマラヤ遠征隊

謹啓 皆様方の御高庇を賜わりまして出発致しました私達パーティは、無事目的を果し、このたび帰国いたしました。これは偏にに尊台を始め皆様方の御芳情のお蔭によるものと、心から御礼申し上げます。

初登頂の二峰は地名からヤジューンI (6024m・舟橋、石田) 同II (5700m・増永、平位) と名付けさせていただきました。

拝眉の上御挨拶申し上げるのが本意でございますが、先ずは書面にて御礼少々御報告申し上げます。 敬具 昭和四二年九月二〇日

大正九年でその時山崎は旅館になっていた。などを語られ、特に数馬の一夜を書いた当座は数馬の宿屋が満員続きで悲鳴をあげた話は面白かった。続いて村井さんから御岳は五十年近い昔馴染であること、曾つて五色で横さんと共に一緒にスキーをした黒井明海軍少佐(筆者のクラス上で昭和八年航空殉職)の追憶録「波の花」(祥会に寄付)の中に彼が御岳に登ったスケッチがあるが、昨年立山のトンネル工事を見たが、大正八年頂上で草鞋をぬがされ裸足で登った頃と比べて山の俗化に暗然としたことなどを話され、中でも明治の末まだ娘時代に戦艦三笠を訪問した話には筆者も一本参った次第。

ここで乾盃夕食に移り全員が二時間に亘り自己紹介を行ない、防大山岳部の「ローガン登頂」防大ワンゲル部の「大雪登山」のストライドを觀賞し一九〇〇歳に楽しんだ日を終った。



- 隊長 大谷 敏夫
- 隊員 増永 迪男
- 隊員 平位 剛
- 隊員 舟橋 明夫
- 隊員 石田 雅則

(会長宛)

追って右報告会はアフガニスタンのストライドを中心に去る10月4日午後5時30分より、広島大学会館の二階大集會室において開催されましたのでお含み置き下さい。

【編者注・本山行については本号2頁以下参照のこと。中部H・Kにおいて残されていた数少ない六〇〇〇峰の初登頂を譲られたことは、日頃の研究成果として祝福したい。】

◇帰国御挨拶◇

高橋 定昌

謹啓 秋冷の候、皆様お元気にお過ごしですか。

皆様のご支援のおかげで、西バキスタン・ヒンズー・クシニ・ヒマラヤへ出発したのは、六月二〇日でした。それから一〇日間、一応の成果をおさめ、九月三日無事帰国いたし得ましたことを、感謝とともに御報告申し上げます。

経過は、七月九日、チトラルからキヤパンに移り、ザニー峠(Zani-An, 3900m)という峠を越えて、ティリッチ水河の四一〇〇mの地点にBCを建設したのが一日でした。

第一キャンプが四五〇〇m、第二キャンプ、四七〇〇m、第三、五五〇〇m、第四、六〇〇〇m、第五、六五〇〇m、第六、七〇〇〇m(ツェルト・ビバーク)、第七、七二〇〇m(チェココ隊の放置したテント)と伸ばし、三回のアタックを試みましたが、ティリッチ・ミール(七七〇八m)登頂者一人、七五五〇mまで四人、七二〇〇m一人、六五〇〇mまで二人(わたしはここで八日間撮影を担当しました)、四七〇〇mまで一人(隊長)の結果に終わりました。

又、私と一隊員とティームベルガー(Kurt Diemberger, Austria)の三人で、アッハー・ゾーム(六三〇〇m)の登頂(チニコ隊が前に登っていました)に成功しました。

【編者注・】今年度のヒンズー・クシニの成果も次回にわかって来た。前号及び本号に御紹介したものの他にも、新潟大の二人のスカイ・ゾーム(Sucari Zorn, 5972 m)ランガール南東峰(七〇六一m)、サラグダール北峰(七三三八m)、東海大、法政大各一人からなる隊のルンヘー(Lunkho I, 6962m or II, 6955 m)——これについてはまだ詳細不明なるも近く回答がある筈——があり、大阪府立大(堺市)は東京農大と合流してフニ・ゾム山群で活動、という情報があった。

中央大の板倉隊はバンダカーとブント・トリノへ登った。詳細は次号に載せる。

スワットへ行った京都教育大隊は、スワット河の西股へ入って未踏と思われるガブラール河の奥を探っている、同じ地域に入った山口大隊は、フアラク・サール(Farak Sar, 5918 m)に登ったというニュースが、アドルフ老の方から先に知らされて来た。

東大では西部H・Kへ入った八人隊があるが、これは登山ではないらしい。都立大隊は都合で来年に延ばしたことが最近になってわかった。その計画書(一九六七年度分)も入手した。

全然わからないのは東大二人隊、JAC会員二人隊それに東洋大で、これらは全く雲を掴んでいるような状態にある。どなたか御存知の方はご連絡願いたい。

来年もヒンズー・クシニは大分賑やかになりそうである。現に私のところへも五校くらいから問合せが来ているが、高きをのぞまなければいい所は沢山あると思う。今年の外圍隊については、アドルフ老から追々連絡があるが、クルトもグルバーも、ドイツ、チニコそれぞれに七〇〇〇m、六〇〇〇m級の未踏峰を相当片づけている。これらについてはいづれ一括報告するつもり。



ルーム移転  
記念パーティ

ルーム移転の記念パーティが、去る九月八日夜、新ルームで開催された。当夜は、百名を越す多数の方々の参加が予想され、どうなることかと心配されたが、案に相違して、賑やかな楽しいパーティであった。



松方三郎  
会長の挨拶と虎ノ門に初めて、クラブ・ルームを持ってきたときの  
お話を始



多数の参加者のために、当初の予定を変更して、来会された方からほとんど飲んで頂くというにしましたので、五時半には早くも、生ビールの樽が空けられ、定刻六時には、すでに賑やかなパーティとなっていた。

③ 司会者 深田久弥氏



ただ、残念だったことは、このルームの改造工事、移転、室内の整備等、全ての面で、並々ならぬ情熱と、寝食

④ 名譽会員 近藤茂吉氏と田部重治氏

まり、藤島敏男名誉会員の、お茶ノ水に戦後、小屋風のルームを建てたときの苦勞話、折井健一評議員の、原宿へ引越しなければならなくなったときのお話が続き、当時の諸先輩方の苦勞を今更ながら、伺い知ることができた。

を忘れんばかりの努力を払われた松田雄一常務理事が、広島へ出張中のため出席することができなかったことである。氏自身にとっても残念なことであったに違いない。



⑤ 松方会長の熱弁

り尽きない方が、三々五々、二次会へ足を運ばれたことは、いつもの例であった。

- ◇ [出席者] 神谷 恭、山本朋三郎、松本熊次郎、足立源一郎、渡辺公平、春田俊郎、山崎安治、堀川英司郎、小味秀純、原田幹市、齋藤 桂、田口三郎助、小山勝司、菊地文雄、小野利次、新堀春喜、朝井一男、栗林一路、中保、松永敏郎、折井正子、関根吉郎、小林猛臣、今井雄二、高田健夫、三島昌夫、藤井運平、辰沼広吉、幸野隆史、鍋田詔子、森野勝子、外山義夫、鈴木郭之、藤島敏男、川喜田壮太郎、浜岡透、関口周也、浜田一馬、今井喜美子、田辺主計、中屋健一、岩野正代、入沢文明、三浦義明、近藤 等、川森左智子、三浦俊則、岡本陸人、牧野 衛、進藤波男、岩崎三郎、野上成男、今井嘉道、島田 巽、増本 茂、成瀬岩雄、野田三郎、田部重治、近藤茂吉、広瀬



⑥ 名譽会員、神谷恭氏の右は古い監事、野口末延氏

一隆、松原善志、松方三郎、石原憲治、丹部節雄、北 博正、村井米子、高遠宏、稲田房子、野口末延、池田光二、須田紀子、富田美智子、河村栄二、茶谷東海、グレン・コンヴァース、羽田栄治、山里寿男、大貫良夫、西方芳太郎、望月達夫、風見武秀、松井芳隆、高橋 照、堀田弥、関田美智子、阿部正子、武田満子、鈴木英一、深田久弥、広羽 清、荻野和夫、伊吹一郎、山崎金次郎、広谷光一郎、平柳一郎、長尾梯夫、齋藤健治、雁部貞夫、中島寛、井上 博、竹田寛次、岩永信雄、村木潤次郎、城谷一誠、具森健治、花輪博忠、勝田房治、大塚亨、加藤泰宏、沼倉寛二郎、飯野 享、永原輝雄、折井健一、芳野起夫、芳野菊子、木野惺、岡部浩子(以上二七名)

- ① 羽田栄治氏
- ② 牧野 衛氏
- ③ 写真提供者

図書紹介

飯豊連峰大地図

藤島玄編

会報に書評はあるが図評がないのは淋しい限りだ、と編者から五万分の一の表記の大地図が送られてきた。飯豊山については全く地理不案内な小生が図評などはとてもできないので、その紹介でかんべんしていただきた。

大地図というだけあって、計ってみたら、タテ百七センチ、ヨコ七十八センチ、重さ八十グラムあった。五万分の一の大目岳、飯豊山全図、これにその周辺の中条、新発田、津川、御神楽岳、野沢、喜多方、熱塩、玉庭、手の子、小沢の一部を登山十二枚を一つに纏めた三色ずりの表に大地図である。登山道、山小屋など最近のものはずべて記載されていることはいうまでもない。またこまかな沢、尾根、ピークなど国土地理院の地図に名称が付されていないところもすべて記されている。

名称は大地図となっているが、その裏面には、飯豊連峰概観、地形、人文、交通と温泉、登山の注意、地図の読み方、植物、気象、宿泊施設、行程表、概念図、それに主要コース二十の案内がくわしく記されていて、地図とは題しながら完べきなガイドブックとなっている。

大目岳頂上から東面のスケッチを入れた各ピークの名称がこまかく説明してあり、平面的な行程表のほか、西面および東面の立体的な登降表も付されているが、これはまさに編者の苦心作であろう。いつか胎内尾根に編者のお伴をして登ったことがあるが、その時編者はルートの詳細をくわしくノートに書きとめながら登られていた。

とてもわれわれズボラ者には真似のできないことだと感心したのだが、そうした人知れない苦心がここに突っ込まれている。編者のライフワークともいえる心のこもった地図で、下手なガイドブックを求めると、飯豊山に出かけるなら、この地図を求めたいことを編者により朝日連峰案内地図が出されている。

国土地理院の地形図を集成複製したものので市販はされていないが、直接編者に申し込むか、または日本山岳会のルームにも若干置いてあるので、希望者は百五十円で付けてもらえる。(山崎安治)

ノートン著 『エヴェレストへの闘い』

『エヴェレストへの闘い』 — ヒマラヤ名著全集3 — マロリーとアーヴィンが山頂を目指して行を起したまま不帰の客となった一九二四年のエヴェレスト遠征については、既に多くの人が熟知しているが、その正式報告書である "The First for Everest: 1924" は現在では稀覯書に属するためか、その古典によって、じかにその登山の模様を繙読した人は、日本人では案外少ないのではないかとと思う。

この度会員山崎安治氏による、その全訳(但し第三部の観察報告を除き)が刊行されたことは意義少なしとしない。幾冊かのエヴェレスト登山の報告書の中で、ハントの「登頂」と共に最も重要なものは、今回訳出された一九二四年のそれであることに異論を唱える者はあるまい。

特に本書のなかで印象的な箇所は、(1)第四キャンプにとじこめられた四人のシエルバを、ノートン、マロリー、

サマヴェルが救出するくだり(第四章の後半)、(2)ノートンとサマヴェルの登攀(第五章)、(3)マロリーとアーヴィンの登攀とオーデルの行動(第六章)の三箇所であろう。また三十余頁に亘るマロリーの手紙(第二部)も読者の心をつ打つであろう。

各執筆者による冷静な筆致のなかに、読者は強い人間愛の精神を或いは執拗な登頂意欲を感じとるであろう。そして、これらの行為は人間が山登りを続ける限り、年を経ても色あせることなく、読むたびに人の心を揺り動かすであろう。

山崎氏の訳文は、読み易い好い現代語に移されている。原書の第三部が省かれている代りに、付録Aとしてサマヴェルの著 "After Everest" の一部、後年A.J.に二回に亘って掲載された、エヴェレストで発見されたピッケルがアーヴィン所有のものであったと確定するオーデルの二つの文章が追加されている。また付録Bとしてノートンの追憶が添えられているが、共に適切な処置で本訳書の価値を高めている。

また吉沢一郎氏による解説(エヴェレストの山名考)と関係資料が追加されていて、読者は最近の状況までも知ることが出来、エヴェレスト研究には欠かせぬ書といえよう。

写真は主なものゝ巻頭に、本文中にも一部挿入されている。巻頭に掲げられた風見武秀氏のカラー写真は、極めて見事な作品ではあるが、本書の如き古典の訳書にはむしろサマヴェルの水彩画を原色で再現して欲しかったと、私は思う(小さな写真版で一枚は載せられているが)。原書は八枚の美しい水彩画(原色版)によって飾られているのである。

また巻末の地図はドイツ訳の版からとられたものであろうか、何の説明もないので想像だけである。フィートを

メートルで表示してあるので、その方が日本人には親切と考えての結果と思うが、簡単な説明が欲しかったと思う。とまれ会員によって、また新しく立派な訳書の世におくられたことに大きな喜びを覚える。(A5判三五〇頁、一九六七年八月二五日、あかね書房刊、定価一〇〇〇円)(望月達夫)

「ヘディン中央アジア探検紀行全集」寄贈受入れのお知らせ 図書委員会

この度深田理事のお骨折により、白水社より、同社刊の標記全集全巻一冊が寄贈されました。会員各位の御協力によりルームの図書が増え、書架が埋まっていくことは欣ばしいことです。

- ① アジアの砂漠を越えて(上下) 横川文雄訳 昭41・2
② トランスヒマラヤ(上・下) 青木秀男訳 昭40・7・9
③ ゴビ砂漠横断 羽鳥重雄訳 昭39
④ ゴビ砂漠の謎 福田宏年訳 昭40
⑤ 戦乱の西域を行く 宮原朗訳 昭40
⑥ シルクロード 西義之訳 昭41
⑦ さまよえる湖 関 楠生訳 昭42
⑧ 探検家としてのわが生涯 山口四郎訳 昭41・1

定期刊行物受入報告 (42・7・8)

昭和三十二年度懇親山行 とき 十一月十八日(土)夕方から十九日午後まで ところ 名栗深谷 西山荘

飯能駅前「かじや」下車、川を終点直前「かじや」下車、川を対岸に渡り、正面の山すそにある農家。

注意 多人数のときは寝具不足になるから、寝袋持参が苦にならない人は持ってきて下さい。ない人はシキフ、枕カバー、ネマキ持参。自炊なので申込みを確実に、現地では多少働かされる覚悟のこと。申込 山岳会ルーム 会費 終了時に計算してから集金

- 1. 岳人 236(42.7)~238(42.8)
2. 山と溪谷 344(42.7)~346(42.8)
3. HIKER 141(42.7)~142(42.8)
4. アルプ 111(42.5)~113(42.7)
5. 旅と雪 9(42.6)
6. 旅情 No. 3(67年夏の号)
【部報・年報】
北大山岳部々報 第10号 1966
鵬翔(鵬翔山岳会)一九六六年度年報 一一一号
鹿児島大学山岳部部報 第9号(1963.11~1966.11)
ZINN(魚津岳友会年報) No. 11
【会報・月報】
1. OMCレポート 206, 209~213 (42.1, 42.4~8)
2. 京都山岳 503~507(42.4~8)
3. あしなか 103~104(42.4~42.6)
4. 山毛榉林 120~128(41.9~42.7)
5. 兵庫山岳 1~2(42.6~42.7)
6. 山書月報 54(42.7)
7. 山書研究 7~8(41.12~42.7)
8. 山嶺 446, 448(42.6, 42.8)
9. 雪と岩(日本登山学校) 10~15 (41.3~42.6)
(以下次号)

昭和三十二年度懇親山行 とき 十一月十八日(土)夕方から十九日午後まで ところ 名栗深谷 西山荘

飯能駅前「かじや」下車、川を終点直前「かじや」下車、川を対岸に渡り、正面の山すそにある農家。注意 多人数のときは寝具不足になるから、寝袋持参が苦にならない人は持ってきて下さい。ない人はシキフ、枕カバー、ネマキ持参。自炊なので申込みを確実に、現地では多少働かされる覚悟のこと。申込 山岳会ルーム 会費 終了時に計算してから集金

ルーム基金募金 状況について

ルーム基金 募金委員会

一、六月から開始した募金は九月末現在で申込件数一、一三九件六、二〇六口(内会員一、一〇一件四九五一口)となりましてが、目標額八百万円にはなっておりませんが、このため募金期間を目標達成まで延長することいたしましたので、なお一層のご協力をお願いいたします。今回より状況報告を兼ねて応募者明細を發表させていただきますことといたしました。

二、応募者明細は九月末現在をもつて五十音順といたしましたが手違いのありました節は予めお詫びするとともに事務局宛ご一報下さいますようお願いいたします。申込口数頭部※印は未払込の表示ですので、未払込の方はよろしくお願いいたします。分割払の方については※印は付してありません。

三、十月以降分については次号より逐次發表させていただきます。なお募金収支明細については目標達成次第報告の予定であります。

Table with columns: 氏名, 会員番号, 応募口数, 現住地. Includes names like 相川 修, 栗飯原 健三, 青木 隆, etc.

Main table listing donor details: 氏名, 住所, 年齢, 性別, 職業, 収入, etc. for each donor.

岡安正光	岡山大学山岳会	六二七二	四一〇九	三東	川村博通	四〇一一	三東	雁部貞夫	六二八八	三東	九州大学山岳部	六〇二二	五福	岡小	五七七六	一長	野田
岡本丈夫	岡本	五五〇五	三三〇五	二北	川端信治	五三二五	三東	岸土山岳会	四一四九	五東	岸田	五三〇六	一福	小	四〇四六	二福	岡
岡本竜夫	岡本	四四〇七	二四〇七	一山	川津善隆	四九二九	三東	京都山岳会	三三二五	一廣	京都	三三〇六	五都	小	四〇四六	四新	岡
岡本如矢	岡本	一六〇二七	一六〇二七	三神	川崎精隆	五五九三	一五	清田	五五九三	一石	清田	五五九三	五都	小	四〇四六	一兵	岡
岡村治信	岡村	三三三三	三三三三	三東	川崎隆章	三〇四三	三東	北村	五五九三	二東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
岡部みち子	岡部	五〇〇三	五〇〇三	一東	越智孝次	二九九九	二大	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	一福	小	四〇四六	一秋	岡
岡部浩子	岡部	五八一一〇	五八一一〇	三東	越智津子	五三二九	一兵	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
岡部徳之助	岡部	二七一	二七一	一〇	杜太郎	一三六九	五〇	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
岡田光行	岡田	五九三九	五九三九	二秋	川喜田忠	四〇四二	一〇	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
岡田芳一	岡田	三九六九	三九六九	一〇	川喜田上	六二〇七	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小里茂雄	小里	二七九	二七九	五東	井井通	五〇二二	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小原晴子	小原	五四八	五四八	三神	井井通	五七四七	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小野勝郎	小野	二五七	二五七	二神	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小野健治	小野	五七〇	五七〇	一新	加行	五三六八	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小野照治	小野	四六二	四六二	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小野利次	小野	四八九	四八九	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小野貴司	小野	五七〇	五七〇	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小野敏弥	小野	六一七	六一七	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小野達雄	小野	五三三	五三三	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小堤達雄	小堤	五三三	五三三	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小田和友	小田	三三六	三三六	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小田部学	小田	三三六	三三六	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小田部政行	小田	三三六	三三六	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小田武磨	小田	五八五	五八五	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小椋凱夫	小椋	六二一	六二一	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小倉勝男	小倉	四〇〇	四〇〇	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小倉董子	小倉	三九〇	三九〇	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小倉章弘	小倉	六二五	六二五	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小方全三	小方	四一三	四一三	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小笠原三郎	小笠	四一三	四一三	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小川のり子	小川	四一三	四一三	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
小川武六	小川	六三〇	六三〇	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡
往古豊秀	往古	六一九	六一九	一新	加行	四七六五	三東	北村	五五九三	三東	北村	五五九三	三東	小	四〇四六	三東	岡









現在迄の意見をまとめると、アマチュアの指導員については検定制度そのものに問題があり、検定よりも指導者研修会の修了証書のものでのよいのではないかと考えている。

但し医師の国家試験と同様に、人の生命を預かるプロ・ガイドであれば、当然厳重な国家検定がなされなければならない。この点についても方法論に問題がある。いずれ近い中に結論がでると思われるので次の理事会で報告することに致したい。

(6)常務理事一名増員の件

加藤常務理事が長期病欠のため、常務理事一名を増員したいとの提案があり、出席理事一同の互選により、丹部理事を常務理事として、満場一致推薦した。

(7)事務員交替の件

会報二六五号に折込みとして募集を発表したところ、男子四名、女子三名の申込があったが、決定については常務理事一任とすることに。尚募集要領には会員は除くとしたが、会員中からも適当な者があれば採用してもよいということを確認した。

(8)ルーム移転記念パーティー開催の件  
名称を右の様にきめ、九月八日(金)午後六時より開催する。会費五〇〇円。通知は八月の会報で行ない、特にそのためのお知らせは出さない。

(9)日印婦人合同登山隊派遣の件：広谷インド国防省のサリン氏より六月三十日付、三田副会長に来信あり、一昨年から懸案の合同登山計画を来春を期して実施したい。場所はHimmachal Pradesh地区。本件につき婦人懇談会で検討した結果、隊員の人数は特に限定せず、自己負担六〇万円の線で、隊員を会報で公募することにした。

尚この登山隊派遣の準備委員会の委員長に三田副会長を委嘱することを決定。近日中に委員会並びに事務局を作

ることとし、早急に実行計画の準備に着手することにする。

(10)U・I・A・A加盟の件

本会からの問合せに対し日本山岳協会より、加盟方を要請する回答があったので、本会の名で加盟することを決定。直ちに海外連絡委員会と、加盟の具体的手続きをすすめることにする。(会報二六八号二頁参照)

(11)本会重複図書整理の件

寄贈図書で重複しているものにつき、どう処分したらよいか検討した結果、地方支部で図書室をもってるところへ保管を依頼することにする。(以上)

東京都岳連加盟名義変更

東京支部の解散に伴い、東京都岳連加盟名義を社団法人日本山岳会に変更したい旨、変更届を提出していたところ、この度六月十二日開催の都岳連理事会において承認された旨、七月二五日付都岳連発第八五五号を以て連絡がありましたのでお知らせ致します。

韓国山岳会会長来訪

韓国山岳会会長李殷相 (Lee Eun Sang) 氏はこの度、日本政府の招待により、八月一日来日されたが、八月十二日午後、駐日韓国大使館の申集浩 (Shin Jipho) 氏他一名の案内で、本会ルームを訪ねられ、松方会長と親しく懇談された。李会長から韓国山岳会のパッチが贈られたが、本会からも、正章、ペナント、「山岳」61年号を贈呈した。

台湾省山岳協会会長来訪

台湾省体育会山岳協会会長周百鍊先生が世界一周旅行の帰路日本に立寄られ、八月十六日夜、本会ルームを訪ね

られ、松方会長と懇談後、丁度小集会がルームで開催されておりしたのでお集りの会員の方に紹介されたあと、小集会に出席されました。

新職員紹介

永原輝雄氏 去る七月三十一日付退職した川瀬伊三郎氏の後任として、八月十四日より、本会書記として勤務につかれた。永原氏は会員番号一六九三番の古い会員で、三井物産時代外地で活躍されたこともある。本会会報にも時々寄稿され、又本会六十周年を記念して、JACのマークの木彫りを寄贈されたこともある。同氏による新ルームの事務体制の確立に大いに期待している。

佐々木光子嬢 永らく会務に尽力された若村嬢が九月八日を以て健康上の理由で退職されることになったので、その後任として、経理担当事務員として、九月一日より勤務につくことになりましたので御紹介致します。佐々木さんは八丈島出身、八丈島高校を出られた島育ち、会員石村実氏の紹介により今回の募集に応募された。これ迄童友会教育研究所で総務関係、大機ゴム(株)で経理事務を扱った経験があるので、活躍が期待されています。

退任御挨拶

川瀬伊三郎

残暑お見舞申上げます。御高承の如く、去る七月末日限り日本山岳会を退職致しました。丸一カ年微力ながら会のため働かせて戴き、どうやら大過なく今日に至りましたことは、役員はじめ会員の皆様の御親切な御指導と御支援によるものと心から感謝致しております。今後とも宜しく御交誼と御教導

の程、切にお願い申上げます。拜眉の上御礼申上ぐべき処、取り敢えず書中を以て御礼申上げます。

若村松枝

皆様お元氣にて御活躍の事と存じ上げます。此度健康上の都合により、九月九日をもって長い間お世話になりました事務局を退職致しました。皆様から何かと御心遣いを頂きましたので今日迄無事に過せました事を、厚く御礼申し上げます。

丁度満四年になりますが、御茶ノ水原宿神田と二度の移転や、六十周年記念事業等、思い出深い時代の様に思われます。新ルームのスタートと共に益々充実した山岳会として御発展され、又エベレストに登る時が一日も早く参ります様、心よりお祈り致しまして、御挨拶に替えさせて頂きます。今後共よろしく御指導下さいませ。

ルーム日誌

(42年9月)

- 5日(火) 婦人懇談会(日印合同登山)
- 7日(木) 定例理事評議員会
- 8日(金) ルーム移転披露パーティー
- 11日(月) 集委会員会
- 12日(火) 図書委員会
- 13日(水) 山水懇親会(今井夫妻カナディアン山の旅話)
- 18日(月) 学生部委員会
- 19日(火) 募金委員会
- 20日(水) 婦人懇親会
- 22日(金) 海外連絡委員会
- 25日(月) 集委常任委員会
- 26日(火) 図書委員会
- 27日(水) 第二三五回小集会(フーテンの旅)
- 28日(木) 金井弘夫氏 学生部例会
- 29日(金) 若村嬢送別会

訂正 「山」二六七号二頁上段中央の三行を、左記のように訂正します。：「登山は文化的行為ではあるが、文明的行為ではない。向人的でなく、寧ろ厭人的である」全く同感である。(加藤泰安氏の近著から引用)

集記

☆お約束通り今号には寄附者芳名録を五頁半に亘って掲載した。万全の校正はした積りであるが誤りなきを保しがたい。ご叱声賜われれば幸いである。

☆海外の登山家で私に手紙をくれる人は沢山いるが、その人達からの祝い状で自分の誕生日に気がついた。男女を問わず、手紙を二、三回往復すると必ず相手の誕生日を聞くのが私の習慣になっている。私にとって自分の誕生日などはもうどうでもいいことなのだが、向うの人は皆義理堅い。そういう習慣になっているからでもある。

☆この12月2日、Berkeleyで開かれるAACの年次晩餐会で、Mr.N.B. Clinch がその会長に選ばれることになっている。私の尊敬しているMr.F.P. Farquhar 老から、皆の前で読んでやるからメッセージを送れといっけて来た。近頃の好便であった。(吉沢一郎)

あなたのネガから パネル張り  
**山岳写真**を  
ありし日の、苦斗と歓喜をいまここに

35mmからすばらしい迫力!

あなたのネガから、明快なコントラストと適切なトリミングで、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。ネガと返送料150円同封でご注文下されば到着後1週間前後で製作発送いたします。代金は着品後10日以内にご送金下されば結構です。なお代金前払いの方には送料は弊社で負担いたします。但し、ネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちにご返送申上げます。

お気軽にネガを送って下さい

白黒の部	
■全紙半分.....パネル張り	¥ 1,200
■全紙(新聞1ページ大).....パネル張り	¥ 1,600
■全紙2倍.....パネル張り	¥ 4,000
カラーの部(ネガ、カラーに限ります)	
■四切.....パネル張り	¥ 1,500
■半切.....パネル張り	¥ 3,000
■全紙.....パネル張り	¥ 5,000

上記以外のサイズ、または同時に多数のご注文の際はご照会下さい。別にお見積申上げます。



カタログ進呈

本多写真

優れた技術とハイセンスの

本多善博

名古屋市熱田局区内柴田西町1-16 TEL (611) 7047

昭和四十二年度  
「山」会報編集委員の顔振れ

編集代表 吉沢一郎  
松田雄一  
小宮方全  
宮内通雄  
竹本矩敏  
坂井祥明

担当理事 酒井敏明

昭和四十二年十一月十日発行  
東京都千代田区神田錦町三二二三 向井ビル  
発行所 法人 日本山岳会  
編集代表 吉沢一郎  
価額五十円 (293) 七四四一  
振替口座東京四八二九番  
東京都港区赤坂一丁目三番六号  
印刷所 株式会社 技報堂

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)  
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内  
電話 (352) 1556・1557